

15 永久歯萌出遅延及び歯列不正の要因となった歯牙腫5症例

○砥上照美、*本川 涉

とがみ歯科医院・福岡市
*福岡大・小児歯

歯牙腫はエナメル質、象牙質、セメント質などの増殖によりなる腫瘍性病変であり、現在では集合歯牙腫と複雑歯牙腫に大別されている。この歯牙腫の存在により歯牙萌出遅延、乳歯晩期残存、歯列不正などが生じることが多い。

今回、当院管理化におかれている患者のうち永久歯交換期において、永久歯の萌出遅延、歯列不正、及び乳歯晩期残存をまねいた患者のうち5名に歯牙腫が認められたので報告する。5症例すべてが永久歯歯胚に由来するもので上顎前歯部に発症したものは、集合歯牙腫と複雑歯牙腫一例づつであり、このうち集合歯牙腫の症例は上顎中切歯の捻転をひきおこして。またこの2症例については、定期診査時のX-rayがあるため歯牙腫の形成を経時的に観察しうることができた。

○7才女兒（S57年4月生）

上顎左側乳中切歯の晩期残存を主訴とする。X-rayにより左側中切歯上部に複雑歯牙腫を認める。1カ月後に歯牙腫を摘出し現在観察中である。

○8才男児（S54年8月生）

右側上顎中切歯と側切歯の間に集合歯牙腫を認める。このため右側中切歯に捻転が生じて。2個の集合歯牙腫を摘出後、床装置で歯列を改善した。

○8才男児（S54年11月生）

右側下顎第一大臼歯の萌出遅延を主訴とする。X-rayにより歯牙腫を認め63年1月に摘出、3カ月後には第一大臼歯の自然萌出が始まり現在は咬合線上に達した。

○11才男児（S51年7月生）

左側下顎乳犬歯と第一乳臼歯の晩期残存を主訴とする。X-rayにより乳歯根下に集合歯牙腫を認める。S62年3月に9個の歯牙腫を摘出、9カ月後には「34」の自然萌出が開始し、現在ではほぼ萌出を完了している。

○17才女兒（S45年4月生）

右側上顎第二大臼歯の萌出遅延、X-rayにより複雑歯牙腫を認める。

16 口唇閉鎖機能を簡便に診断する方法の試行

○毛利元治、石橋美佳

もうり小児歯科・福岡市

最近、噛めないなど摂食機能の問題が取り上げられる機会が多くなった。二木や向井らは、摂食機能は出生後の経験や学習によって獲得され、離乳期に一定の順序を踏んで発達する。その第一歩は、上唇を下げて口唇を閉鎖することであり、口唇閉鎖は離乳初期に、成熟型嚥下は中期に、咀嚼は後期に獲得され、1～3才で完成される。また、この時期に咀嚼能力の獲得を失った場合には、その獲得に数倍の努力が必要であると述べている。

一方、異常嚥下癖など口腔周囲筋の不調和は、不正咬合やその悪化の原因になる。また、習癖の改善には本人の自覚が欠かせないが、患児はもちろん、保護者さえも異常嚥下癖を気付いていないことが多い。小児歯科領域でも、習癖の改善に筋機能訓練法が指導されるようになったが、その適応が患者自身の理解と積極的な練習意欲を得られる場合に限られるために、患児の年齢に限界がある。

さて、演者らの医院は幼児期から来院する小児が多く、早期に患児の異常嚥下癖を把握する手段があれば、習癖の固定化を防止し、さらに健全な機能を育てるのに有利な状況にある。また、定期診査時に、保護者自身の目で患児の摂食能力を確認して頂き、意識を高めることによって、日常生活の中にも正常な咬合を育成する工夫が生まれてくるのではないかと思う。

この手段として、スプーンから液体を口腔に取り込む際の口唇閉鎖機能、つまり捕食動作を診査して、保護者と患児の理解を求める方法を試行している。この診査と指導には歯科衛生士があたり、歯科医が視診で診査した歯列弓の形態と咬合関係とともに、一定の診査用紙に記録を残している。

今回、指導を開始する前の捕食動作について記録用紙の集計を行った。また、現在の生活環境や離乳食について、200名以上の保護者からアンケートの解答を得たので、それ等の結果について報告する。